## 【1】『十二遊経』の訳出について

### ［1］経録の記事

僧祐の『出三蔵記集』には、「旧録に十二由経と云」われる『十二遊経』とそれの「異本であるが大同小異」であった『十二遊経』の２つの訳が挙げられるが、両者とも失訳とされる(1)。

費長房の『歴代三宝紀』は武帝の世に彊梁婁至が太始２年（A.D.266）または太康２年（A.D.281）に広州において訳した『十二遊経』(2)と孝武帝の世に迦留陀伽が太元 17 年（A.D.392）に訳した『十二遊経』(3)、それに文帝の世に求那跋陀羅が訳した『十二遊経』を加えて３訳があったと伝えている(4)。

その後の道宣の『大唐内典録』(5)、靖邁の『古今訳経図紀』(6)、明佺の『大周刊定衆経目録』(7)、智昇の『開元釈教録』(8)、圓照の『貞元新定釈教目録』(9)は『歴代三宝紀』にならって３訳を伝え、１存２欠としている(10)。

(1)『出三蔵記集』（大正 55　p.030 中）；十二遊経一巻（旧録云十二由経）／　十二遊経一巻（異本大同小異）

(2)『歴代三宝紀』には彊梁婁至の訳出について２種の年代が記されている。「十二遊経一巻　右一経一巻。武帝世。外国沙門彊梁婁至。晋言真喜。太始二年於広州訳。見始興及宝唱録」（大正 49　p.065 上）というものと「泰康……（辛丑）二（彊良婁至出十二遊経一巻）」（大正 49　p.038 上）というものである。

(3)『歴代三宝紀』（大正 49　p.070 中）；十二遊経一巻（第二出与彊梁訳者小異）　右一巻。孝武帝世。外国沙門迦留陀伽。晋言時永。太元十七年訳。見竺道祖晋世雑録及宝唱録

(4)『歴代三宝紀』（大正 49　p.091 中）；十二遊経一巻（第二出与晋世迦留陀伽訳者小異見旧録）……右七十八経合一百六十一巻。文帝世。中天竺国三蔵法師求那跋陀羅……

(5)『大唐内典録』（大正 55　p.236 上）；十二遊経一巻　右一経一巻。武帝世外国沙門彊梁婁至。晋言真喜。太始二年於広州訳。見始興及宝唱録

『同』（大正 55　p.243 中）；十二遊経（一巻）　右上一経武帝世。外国沙門彊梁婁至。晋言真喜。太始二年。於広州訳。見始興及宝唱録

『同』（大正 55　p.246 中）；十二遊経（第二出与畺良訳者小異）　右一巻。孝武帝世。外国沙門迦留陀伽。晋言時水。太元十七年訳。見竺道祖晋世雑録及宝唱等録

『同』（大正 55　p.259 上）；十二遊経（第二出与晋迦留陀伽訳小異見旧録……右七十七部。合一百六十一巻。文帝世。中天竺国三蔵法師求那跋陀羅……

(6)『古今訳経図紀』（大正 55　p.354 上）；沙門彊梁婁至者。此云真喜。西域人也。志情曠放弘化在懐。以晋武帝太康二年歳次辛丑。於広州訳。十二遊経（一巻）

『同』（大正 55　p.356 下）；沙門迦留陀伽。此云時水。西域人。弘喩有方懐道遊国。以晋孝武帝泰元十七年歳次壬辰。訳十二遊経（一巻）

『同』（大正 55　p.362 上）；沙門求那跋陀羅。此言功徳賢。中印度人。……十二遊経（一巻）

(7)『大周刊定衆経目録』（大正 55　p.431 上）；十二遊経一巻（五紙）　右西晋武帝代沙門姜梁婁至於広州訳。出宝唱録／　十二遊経一巻（五紙）右東晋孝武帝代沙門迦留陀伽訳。出長房録／　十二遊経一巻　右宋文帝代沙門求那跋陀羅訳。出長房録／　以前三経同本別訳

(8)『開元釈教録』（大正 55　p.497 中）；十二遊経一巻（初出）　右一部一巻本欠　沙門彊梁婁至。晋言真喜。西域人。志情曠放。弘化在懐。以武帝太康二年辛丑。於広州訳／　十二遊経一部見始興録及宝唱録

『同』（大正 55　p.505 中）；十二遊経一巻（第二出与晋梁訳者少異見竺道祖晋世雑録及宝唱録）　右一部一巻其本見在　沙門迦留陀伽。晋言時水。西域人。弘喩有方懐道遊国。以孝武帝太元十七年壬辰。訳十二遊経一部

『同』（大正 55　p.528 下）；十二遊経一巻（第二出房云見旧録）……沙門求那跋陀羅。宋言功徳賢。中印度人也……

『同』（大正 55　p.623 上）；十二遊経一巻（東晋西域沙門迦留陀伽訳　拾遺編入　第二訳三訳二欠）

『同』（大正 55　p.650 上）；十二遊経一巻　西晋西域沙門彊梁婁至訳（第一訳）／　十二遊経一巻宋天竺三蔵求那跋陀羅訳（第三訳）／　右前後三訳一存二欠

『同』（大正 55　p.668 中）；十二遊経一巻　東晋沙門迦留伽陀訳

『同』（大正 55　p.696 下）；十二遊経一巻六紙

『同』（大正 55　p.721 中）；十二遊経一巻（六紙）東晋迦留陀伽訳

(9)『貞元新定釈教目録』（大正 55　p.794 下）；十二遊経一巻（初出）　右一部一巻本欠　沙門彊梁婁至。晋言真喜。西域人。志情放曠弘化在懐。以武帝太康二年辛丑。於広州訳十二遊経一部。見始興録及宝唱録

『同』（大正 55　p.802 中）；十二遊経一巻（第二出与晋良訳者少異見竺道祖晋世雑録見宝唱録）　右一部一巻其本見在　沙門迦留陀伽。晋言時水。西域人。弘喩有方懐道遊国。以孝武帝太元十七年壬辰。訳十二遊経一部

『同』（大正 55　p.825 下）；十二遊経一巻（第三出房云見旧録）……沙門求那跋陀羅。宋言功徳賢。中印度人也……

『同』（大正 55　p.956 下）；十二遊経一巻　東晋西域沙門迦留陀伽訳　拾遺編入　第二訳三訳二欠

『同』（大正 55 p.986 中）；十二遊経一巻　西晋西域沙門彊梁婁至訳／　十二遊経一巻　宋天竺三蔵求那跋陀羅訳第三訳／　右前後三訳二存一欠

『同』（大正 55　p.1008 上）；十二遊経一巻　東晋沙門迦留伽陀訳

『同』（大正 55　p.1044 下）；十二遊経一巻六紙

(10)『貞元新定釈教目録』（大正 55 p.986 中）にのみ「三訳二存一欠」とあるが誤りか？

［2］「１存２欠」に対する疑問点

２つの失訳または「１存２欠」のどちらを信じるにしても、複数回の翻訳が実際になされたならばインドないしはその周辺地域に由来する原典の存在が想定される。しかしこの『十二遊経』が原典から翻訳されたものであることに対してすでに先人が疑問を提している(1)。それは経文自身に起因する疑問である。

現存する『十二遊経』の末尾には、諸国の国名の晋における訳語の列挙や(2)、閻浮提中の諸国と諸王などについての雑多な記述が存し、十六大国、八万四千の城、八国王、四天子（晋天子、天竺国天子、大秦国天子、月支天子）などが挙げられている(3)。このことは『十二遊経』をインドに由来する原典から翻訳したものと見なすことを難しくしている。

しかしながらこの末尾の記述のみが訳経者による付加であると考えれば、インドに由来する原典の存在も否定できない(4)。今のところは「１存２欠」を完全に否定する要素はない。

(1)『国訳一切経』（本縁部６　解題　p.316）において常盤大定氏が「記事の体裁は、翻訳というよりも寧ろ選述と見らる底のものである。恐らくは迦留陀伽が諸経律に散説せらるる諸伝を、綜合し来れるもので無かろうかと思う。然らば両訳あったという事は、そのままに肯定出来ぬ事となる」と述べておられる。

(2) 『十二遊経』（大正 04　p.147 中）；波斯匿王。晋言和悦。迦惟羅越。晋言妙徳。舍衛国者。晋言無物不有。維耶離国者。晋言広大。一名度生死。羅閲祇者。晋言王舍城。鳩留国者。晋言智士国。波羅奈者。晋言鹿野。一名諸仏国。

(3) 『十二遊経』（大正 04　p.147 中）；閻浮提中有十六大国。八万四千城。有八国王四天子。東有晋天子人民熾盛。南有天竺国天子。土地多名象。西有大秦国天子。土地饒金銀璧玉。西北有月支天子。土地多好馬。

(4) 訳経者の付加と考えられる記事は p.147 中の「波斯匿王晋言和悦楽……」から最後までである。